



名古屋芸術大学  
NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS

NUA フィルハーモニー管弦楽団

第13回  
定期演奏会  
「第九」

2024 8.27 tue

開演 18:30 / 開場 18:00

愛知県芸術劇場コンサートホール

この演奏会には高大連携事業の一環として愛知県立明和高等学校音楽科の生徒が参加します。



名古屋芸術大学  
NAGOYA UNIVERSITY  
OF THE ARTS

主催：名古屋芸術大学 / 後援：名古屋芸術大学音楽同窓会





## Program プログラム

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲第3番 ハ短調 作品37

ピアノ独奏：糸野 心鞠（愛知県立明和高等学校音楽科2年）

ベートーヴェン

交響曲第9番ニ短調 作品125「合唱付き」

ソプラノ：山田 知加 / メゾソプラノ：谷田 育代

テノール：中井 亮一 / バス：伊藤 貴之

## Greeting ご挨拶

今日はNUAフィルハーモニー管弦楽団第13回定期演奏会「第九」にご来場頂き、誠にありがとうございます。  
今回のプログラムは前半にベートーヴェンのピアノ協奏曲第三番、後半は同じくベートーヴェンの交響曲第九番を演奏しますが、ピアノのソリストは昨年度に続き高大連携事業の一環として、明和高校音楽科の学生を迎えての演奏となります。若く瑞々しい感性で素晴らしい演奏を聞かせてくれると期待しております。  
さて今回の第九ですが、ソリストは本学の卒業生と教員、また合唱はハルモニア合唱団に加え本学学生及び一般公募による総勢約100名の迫力ある演奏をお届け出来ると思います。  
この「暑い」夏に「熱い」第九を堪能して頂ければ幸いです。それでは心ゆくまで真夏の「第九」をお楽しみ下さい。

名古屋芸術大学教授  
依田 嘉明

## Profile プロフィール紹介

指揮  
松井 慶太



©Ayane Shindo

1984年青森県八戸市生まれ。3歳よりピアノ、15歳よりオーボエを学び、16歳のときピアニストとしてポーランド国立クラクフ交響楽団と共演。2007年、東京音楽大学指揮科卒業。指揮を広上淳一、汐澤安彦に師事。2006年、韓国で行われたアジア・フィルハーモニック・オーケストラにて指揮をチョン・ミョンフンに師事。2009年、第15回東京国際音楽コンクール入賞・奨励賞受賞。これまでに、ライブツィヒ交響楽団、プラハ交響楽団室内オーケストラ、ドナウ交響楽団、東京シティ・フィル、日フィル、パシフィックフィルハーモニア東京、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪響、九響、京響、群響、札幌響、セントラル愛知響、仙フィル、名フィル、関西フィル、中部フィル、山響、シエナ・ウインド・オーケストラ、東京吹奏楽団、東京室内歌劇場等を指揮。2008～2014年には、N響定期演奏会にてシャルル・デュトワ、チョン・ミョンフン、ファビオ・ルイーゼ、トゥガン・ソヒエフらのもとで合唱指揮を務め、公演を成功に導く。2017年からはオーケストラ・アンサンブル金沢、伝統芸能&室内オペラシリーズを指揮し、好評を博している。2011年～2018年東京混声合唱団コンダクター・イン・レジデンス。2022年9月よりオーケストラ・アンサンブル金沢コンダクターに就任。2023年4月より東京音楽大学作曲指揮専攻（指揮）特任講師。

ピアノ  
糸野 心鞠

特別出演（高大連携事業）



2008年生まれ。名古屋市出身。服部浩美、横山幸雄、清水皇樹の各氏に師事。  
「ショパンコンクールin Asia」第17回 小学校1・2年の部 全国大会 銅賞、アジア大会 奨励賞。第20回 小学校5・6年の部 全国大会 銀賞、アジア大会 金賞。「ピティナコンペティション」第40回 B級本選 第1位、全国大会入選。第41・42回 C・D級、本選 優秀賞。第45回 D級本選 第1位、全国大会 ベスト賞。「全日本学生音楽コンクール」名古屋大会 第72回 小学校の部 第3位。第75・76回 中学校の部 第2位・第1位、全国大会入選。第77回 高校の部 第2位 全国大会入選。第11回オーディション合格者による奏心会フレッシュコンサート出演。現在、愛知県立明和高等学校音楽科2年在学中。



## Profile プロフィール紹介



### ソプラノ 山田 知加

愛知県豊田市出身。名古屋芸術大学音楽総合コース卒業、同大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。  
2016年度岐阜国際音楽祭コンクールにて第2位入賞。第41回飯塚新人音楽コンクールにて第1位、及び文部科学大臣賞受賞。令和6年度奏楽堂日本歌曲コンクール入選。オペラでは「つばめ」マグダ、「ファルスタッフ」アリーチェ、「魔笛」侍女I、「子供と魔法」安楽椅子・ふくろう、「メリー・ウィドウ」ハンナ、「不思議の国のアリス」公爵夫人、「泣いた赤鬼」ナレーターとしてそれぞれ出演。宗教曲ではベートーヴェン「第九」「合唱幻想曲」、ブラームス「ドイツレクイエム」、フォーレ「レクイエム」、リバ「チェコのクリスマスミサ」などのソリストを務める。名古屋音楽大学声楽コース・学科公開講座「ヴォーカル・アカデミー」ヴェッセリーナ・カサロヴァのマスタークラスを受講。現在、びわ湖ホール声楽アンサンブル・ソロ登録メンバー。これまでに声楽を見玉弘美、森谷真理、中嶋俊晴の各氏に師事。今後は2024年12月8日・15日藤沢市民オペラ「魔笛」侍女Iにて出演予定。



### メゾソプラノ 谷田 育代

愛知県立芸術大学を首席で卒業、同大学院修了。卒業時に愛知県知事賞(桑原賞)、読売新人音楽賞受賞。在学中より日本声楽コンクール入選など、様々なコンクールに入選、入賞。ウイーンにて声楽ゼミナール受講、イタリアに数度渡り、B.M.Casoni女史のもと研鑽を積む。デビュー後は様々な舞台にて活躍の場を広げ、オペラでは「修道女アンジェリカ」(ブッチーニ作曲)でデビューの後、「フィガロの結婚」、「蝶々夫人」、「カヴァレリアスチカーナ」をはじめ、様々な作品に出演。中でも「カルメン」ではタイトルロールを各地で演じ、好評を得ている。合唱曲のソリストとしては「第九交響曲」をはじめ、「メサイア」(ヘンデル)、「レクイエム」(モーツァルト)(ドヴォルザーク)、「エリヤ」(メンデルスゾーン)、「マタイ受難曲」(J.S.バッハ)など宗教曲のソリストとしても多数出演。また、ヨーロッパ各地(イタリア・ドイツ・フランス・ブルガリア・スロバキア)にてオペラ、ガラコンサートなど出演。その他、東京、関西などにおいて歌曲コンサートに出演。近年、日本歌曲の素晴らしさを再認識し、愛知日本歌曲研究会にて塚田佳男氏のレッスンを受講。アルバム「やさしいあしあと〜にほんのうた〜」をリリース、好評発売中。現在、名古屋芸術大学、名古屋女子大学、桜花学園大学、愛知学泉短期大学各講師。名古屋市民コーラスヴォイストレーナー。愛知日本歌曲研究会会員。名古屋オペラ協会会員。



### テノール 中井 亮一

名古屋芸術大学音楽学部声楽科首席卒業、同大学院音楽研究科修了。スカラ座音楽院オペラ研修所修了。  
スカラ座をはじめRossiniOperaFestivalやフェニーチェ歌劇場などイタリア各地で活躍。これまで「魔笛」タミーノ役、「セビリアの理髪師」伯爵役、「夢遊病の女」エルヴィーノ役、「ドン・パスクワレ」エルネスト役、「椿姫」アルフレード役、「ホフマン物語」ホフマン役、「ファウスト」ファウスト役、「夕鶴」与ひょう役など40作品以上のオペラに出演。22年に新国立劇場本公演「愛の妙薬」にネモリーノ役で主演デビュー。これまでに新国立劇場をはじめ東京文化会館、東京芸術劇場、日生劇場、びわ湖ホール、兵庫芸文など全国主要劇場で出演を重ねている。また東フィル、読響、東響、新日フィル、シティフィル、名フィル、セントラル愛知、中部フィル、京響、日本センチュリー、大響、広響などオーケストラとの共演多数。来年2/8(土)には藤原歌劇団主催公演「ファルスタッフ」(フェントン役)で愛知県芸術劇場大ホールに出演予定。その他「メサイア」「第九」などの独唱、リサイタル、CDリリースなど幅広く活躍中。山口県芸術文化振興奨励賞受賞、同県平生町観光大使。昭和音楽大学(声楽、大学院オペラ)及び桜美林大学(声楽)各講師/名古屋二期会オペラ研修所講師/藤原歌劇団団員。



### バス 伊藤 貴之

名古屋芸術大学卒業、同大学院修了。奨学金を得て渡伊シミラノで研鑽する。  
第48回日伊声楽コンクール第2位、第41回イタリア声楽コンクール金賞、第6回G・ゼッカ国際声楽コンクール第2位受賞。愛知県芸術劇場の「椿姫」でグランヴィール医師役でデビュー以降数々の作品に出演する。近年は新国立劇場「ホフマン物語」ルーテル&クレスベル、「アイダ」エジプト国王、鑑賞教室公演「ラ ポエム」コッリネ、日生劇場「メデア」クレオンテ、「マクベス」バンクォー、「セビリアの理髪師」ドン バジリオ、東京芸術劇場「美しきエレヌ」カルカス、藤原歌劇団「ファウスト」メフィストフェレス、「トスカ」アンジェロロッティ役で出演している。セイジ オザワ松本フェスティバルにおいて故小澤征爾指揮のベートーヴェン第九のソロを歌う。その他にモーツァルト、ヴェルディの「レクイエム」、ベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」、マーラー「千人交響曲」等のソリスト、故アルベルト・ゼッダ指揮「スターバト・マーテル」ではバスソロで出演しNHK-BSで放送された他、「題名のない音楽会」やNHK-FM「リサイタル・ノヴァ」に出演するなど注目を集めている。平成24年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞。平成28年度とよしん育英財団教育文化奨励賞受賞。平成29年度豊田市文化振興財団豊田文化奨励賞受賞。藤原歌劇団団員。

## NUA フィルハーモニー管弦楽団

1st Violin	日比 浩一／嶋脇 真紀／小林 沙耶／伊藤 里紗子／西尾 結花／三宅 由真／森下 麻奈／村瀬 芽吹
2nd Violin	村越 久美子／廣瀬 加奈子／鈴木 眞良／近澤 知世／吉田 純那／齋藤 麻生／小池 アレック
Viola	小中 能会真／大竹 温子／太田 裕佳／柿本 朱美／中村 真貴／大坪 杏
Violincello	高木 俊彰／加藤 志麻／紫竹 友梨／小林 玉実／城間 拓也
Contrabass	伊藤 玉木／山崎 桂奈／楠本 眞平
Flute	上野 博昭／河内 容子／福田 京
Oboe	石田 正／石井 琴香／柿本 美祐
Clarinet	竹内 雅一／黒田 光樹
Bassoon	依田 嘉明／佐保 春奈／井手口 彩子
Horn	八木 健史／吉松 隼／額綱 博巳／後藤 美紗子／森 萌花／金澤 周人
Trumpet	稲垣 路子／赤堀 裕之史／佐藤 真梨菜／永松 花菜
Trombone	永井 淳一郎／古川 磨美／金子 茅紗
Timpani	深町 浩司
Percussion	稲垣 佑馬／都築 陽奈／丸山 侑輝

## NUA ハルモニア合唱団

ソプラノ	稲垣 知葉 梅村 悠 菊池 京子 倉本 亜紗 城山 ゆかり	アルト	稲葉 梨恵 岩田 亜衣 葛巻 しおん 櫻井 厚子 佐藤 安莉	テノール	岩田 健豊 神田 豊壽 北田 一平	バス	大倉 一将 太田 成夫 高柳 耕平 中原 憲 西元 佑	林 祐輔 森 翔吾
------	---	-----	--	------	-------------------------	----	---	--------------

## 名古屋芸術大学学生合唱団

ソプラノ	伊藤 瑠璃 井村 優月 神谷 優佳 久米 愛香 齋藤 咲弥 佐藤奈那江	清水 麻未 成瀬 瑠南 堀江 七海 松本 弥々 山田 弥玖 渡邊 美音	アルト	加藤 ふみ 小林 実礼 左口 日陽 杉本 和花 鈴木 沙季 館内 由衣	長濱 優 濱口 紗雪 濱村 美羽 林 新菜 八木 萌花 山本菜南子	吉田 杏珠	テノール	浅野 舜王 伊藤 優里 安野 風斗	バス	岩見 伶 中西 和音
------	--	--	-----	--	--	-------	------	-------------------------	----	---------------

## NUA フィル第九 2024 特別合唱団

ソプラノ	岩山 有里 大野 光世 金澤美佐子 北市 紋子 木谷 康恵 栗田 さかゑ 黒田 清子 辻 麻美子	土屋里美子 富田満由美 新美 典 西山 恵 原 祐子 久田 睦美 松岡 直美 山下摩里子	アルト	稲垣 良子 井上 笙子 井上 操 梅田 真規 大澤 英子 大野真由美 倉知 幸子 後藤 けい子	佐藤 昭子 鈴木 恵子 鈴木 恵子 永田 智子 廣田 町子 深谷 郁子 松田 美子 水野 洋子	六鹿名代子 安居 空虹 山中 正子	テノール	奥村 保男 杉江 慶三 稲垣 範光 桂川 昇 桐山 茂 倉知 典正 塩澤 全司 早川 勝久	バス	岡崎 定勝 岡本 直城 近藤 米一 榊原 章 富永 正樹 西口 和志 平井 友明 森 昭裕 山田 貢
------	---	---	-----	--	--	-------------------------	------	--	----	--



# Program Note

## プログラムノート

本日のプログラムは、2020年に開催したベートーヴェン生誕250年定期演奏会に続き、オール・ベートーヴェン・プログラムで構成されている。

オーケストラ団体の名称も、今年度から「NUAフィルハーモニー管弦楽団」に改められ、その初回となる本公演では、「ピアノ協奏曲第3番ハ短調」と「交響曲第9番ニ短調“合唱付き”」の2作品で門出に華を添える。

本日のピアノ独奏は、現在愛知県立明和高校音楽科2年で研鑽を積む糸野 心鞠さんが務める。この若き音楽家によるフレッシュな演奏も、公演全体に新生な空気を与えるであろう。

曲目解説：可知 奈尾子

## ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37

本作品は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770年生-1827年没、ドイツの作曲家、ピアニスト)が遺したピアノ協奏曲の中で、唯一の短調の作品である。作曲年は1796年から1803年という長きに渡り、初演に漕ぎ着けた1803年の時点でも、独奏ピアノ・パートは殆ど未完成のままであった。この為、初演ではベートーヴェン自らが独奏ピアノ・パートを即興で演奏したというエピソードが残されている。ピアノ・パートが完成したのは翌1804年。この時の独奏ピアノは弟子が務めていることから、恐らく持病の難聴はかなり悪化していたと推察される。曲の構成は、古典的な協奏曲のスタイルによる3楽章から成り、楽器編成は、独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット(クラリノ)2、ティンパニ、弦楽5部による。本日の楽譜は、ペーレンライター版を使用している。

### ◆ 第1楽章 Allegro con brio ハ短調 4/4 拍子

古典的な「協奏ソナタ形式」による第1楽章は、冒頭から弦楽器群がユニゾンで第1主題(ハ短調の主和音の分散形をモチーフとする)を奏でる。これと対照的に、第2主題では穏やかで牧歌的な旋律が変ホ長調で現れる。この2つの主題がオーケストラのみで提示された後、独奏ピアノがソロで再び第1主題を奏でる。「展開部」に於いても、シンプルな発展経過による構成から、それが逆に主題の印象を深く際立たせている。特に、ベートーヴェン自身が作曲したカデンツァは聴きごたえがあり、ペーレンライター版では58小節という長大な規模になっている。

### ◆ 第2楽章 Largo ホ長調 3/8 拍子

第1楽章とは対照的に、緩徐な第2楽章は独奏ピアノのソロから始まる。この繊細で美しい旋律は、転調も含めたハーモニー進行の豊かさと相まって、ロマンティズムまでも感じさせる。楽曲の構成は「複合3部形式」によるが、「中間部」では「主題提示部」の素材が断片的に散りばめられ、独奏ピアノを軸としながら変容し、発展していく構成美を持つ。巧みなベートーヴェンの職人技に、胸を打たれる楽章である。

### ◆ 第3楽章 Rondo, Allegro ハ短調 2/4 拍子 - Presto ハ長調 6/8 拍子

第3楽章は、独奏ピアノ・ソロの属9の和音による主要主題から始まる。楽曲構成は、2/4拍子のA(ハ短調)-B(変ホ長調)-A(ハ短調)-C(変イ長調)-A(ハ短調)-B(ハ長調)-A(変ニ長調)-コーダ(Presto ハ長調 6/8拍子)という「大ロンド形式」から成る。この楽章の主要主題では、当時流行していたトルコ音楽のリズム(タン(ウン)タン(ウン)タンタン)を弦楽器群がピツィカートで奏で、そのリズムに乗って異国情緒豊かな旋律が奏される。また、Cの部分では展開部的な色合いが濃く、主題要素がフーガ的書法で発展していく。そしてコーダでは明るくハ長調に転じ、Prestoで独奏ピアノが跳躍を含んだパッセージを左右のユニゾンで疾風のごとく奏する。高度な演奏テクニックを要する、非常に華やかな終楽章である。

## 交響曲 第9番 ニ短調 作品125「合唱付き」

本作品は、今更多くを語るまでも無く、音楽史上の傑作の1つに挙げられる。そして後世の作曲家を始めとする多くの音楽家達に、今も尚、多大な影響を与え続けている。筆者自身も、学生時代に5回程合唱団として上演を経験しているほどだ。ベートーヴェンに本作品の創作動機を与えたのは、20代前半に強く感銘を受けたシラーの詞「歓喜に寄す」であった。それから長い年月をかけ、初稿の完成と初演を果たしたのは1824年、ベートーヴェンが54歳の時である。この時には、既に殆どの聴覚が失われており、初演直後の聴衆の大きな拍手も聞こえなかったというエピソードが残されている。そして、その後も幾度も改訂が重ねられ、出版に至ったのが2年後の1826年、亡くなる前年であった。本日の楽譜は、前プログラムと同様にペーレンライター版を使用している。楽器編成は、第4楽章のソリストに山田 知加氏(ソプラノ)、谷田 育代氏(アルト)、中井 亮一氏(テノール)、伊藤 貴之氏(バス)を迎え、合唱(第4楽章のみ)、フルート2、ピッコロ1(第4楽章のみ)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1(第4楽章のみ)、ホルン4、トランペット(クラリノ)2、トロンボーン3(第2、第4楽章のみ)、ティンパニ、打楽器(第4楽章のみトリアングル、シンバル、バスターラムを使用)、弦楽5部で演奏される。

### ◆ 第1楽章 Allegro ma non troppo e un poco maestoso ニ短調 2/4 拍子

弦楽器群の静かなトレモロの中で、第1主題を暗示する部分動機(5度を強調する要素)が呼応しながら始まる第1楽章は、革新的な「ソナタ形式」から成る。この5度を強調する発想は、本日の前プログラムの協奏曲 第1楽章でも既に感じられるが、本楽章ではこれを徹底して使用し、展開している。これまでの古典派の「ソナタ形式」で基準となっていた調の関係性も、その型を破り、ニ短調の第1主題から変ロ長調(平行調の下属調)の明るい第2主題へと移行する。その他の部分においても、長調と短調が交互に入れ替わりながら緊張感を伴って発展していく。「終結部」後半においては、「呈示部」冒頭を想起する弦楽器群のトレモロが再び現れ、不安な様相を感じさせる半音階を奏でながらトゥッティまで高揚し、ユニゾンによる第1主題で大胆に曲を閉じる。また、当時の流行として用いられていた反復記号も本楽章では使用していないことから、547小節という長大な楽章になっている。

### ◆ 第2楽章 Molto vivace ニ短調 3/4 拍子 - Presto ニ長調 2/2 拍子 - Molto vivace ニ短調 3/4 拍子

「複合3部形式」による第2楽章では、スキップをする様なオクターブの跳躍と、それに対比する音階的な動きが組み合わされた主要主題が、フーガ的書法によって発展していく。3拍を1ビートで捉え、疾走するこの「主要主題部」は、「スケルツォ(諧謔曲)」の性格を有し、この部分だけで「ソナタ形式」を想起させる展開を見せる。各部分には、第1楽章では見られなかった反復記号も設定されており、大規模な構成になっている。ニ長調に転じた「中間部」は、2分の2拍子による「トリオ」で、第1楽章にも断片的に現れた、第4楽章との関連を印象付ける旋律によって書かれている。本楽章で特に耳や目を奪われるのは、1オクターブでチューニングされたティンパニが、クールに活躍する曲想である。奏者のパフォーマンスも堪能できる楽章である。

### ◆ 第3楽章 Adagio molto e cantabile

変ロ長調 4/4 拍子 - Andante moderato ニ長調 3/4 拍子 - Tempo 変ロ長調 4/4 拍子

- Andante moderato ト長調 3/4 拍子 - Tempo 変ホ長調 4/4 拍子 - Stesso tempo 変ロ長調 12/8 拍子

木管楽器と弦楽器による2小節の導入の後、弦楽器群によって奏される和音の構成音を中心とした主要主題(第1主題)は、ベートーヴェンの祈りの心中を暗示するかのよう、透明で穏やかな表情を持つ。本楽章は、作品中の「緩徐楽章」に位置付けられるが、これまでの慣例的な楽曲構成は採らず、ベートーヴェンらしい革新に充ちている。上記のテンポ、調性の変化からも推察される通り、主要主題が対比した2つ目の主題(=第2主題)を挟みながら、その都度に変奏され、繰り返される。「ロンド形式」と「変奏曲」との融合、さらに解釈を広げて「2つの主題要素による構成」に焦点を当てれば、「ソナタ形式」との融合も加味することができるであろう。見事な構成美を醸し出す楽章である。そしてこの思考=思想は終楽章へと受け継がれ、見事に開花する。

### ◆ 第4楽章 “Finale”

第4楽章は、音楽史上でも重要な意味を持つ。それは、オーケストラの編成に「カンタータ」の形態である4人のソリストと4声の混声合唱を組み込んだことにある。楽曲の構成も、これまでの器楽に軸を置いた定型的な形式は用いず、20代前半から人生を懸けて温め続けてきた、シラーの詞「歓喜に寄す」の構成に添って作曲している。楽章全体は9つの部分から成るが、この「9」という数字が、第9という交響曲の数字と符合することも非常に興味深い。9つの各部分は、各々の拍子、調性、テンポを有し、全部分を大別すると、第1部分から第5部分までが「第1部」と捉えられる。この「第1部」では、第1楽章から第3楽章までの主要主題が懐古的にオーケストラによって奏され、第4楽章の主要主題である「歓喜の歌」へと繋がっていく。そして、歌詞の内容が変わる第6部分が「第2部」、第7部分から第9部分が「第3部(終結部)」と解釈できる。ベートーヴェンが、生涯で乗り越えてきた幾多の苦難の末に到達した精神世界は、「神」へと通じる信仰の世界であった。本作品は、作曲家・芸術家として歩んできたベートーヴェンの人生そのものを投影していると言っても過言ではない。

### ■ 賛助会員様ご芳名 (敬称略)

宗次 徳二 / いちい信用金庫 / 有限会社ハヤシ・トレーディング・カンパニー / 株式会社舟橋植木 / 久保 雅猛